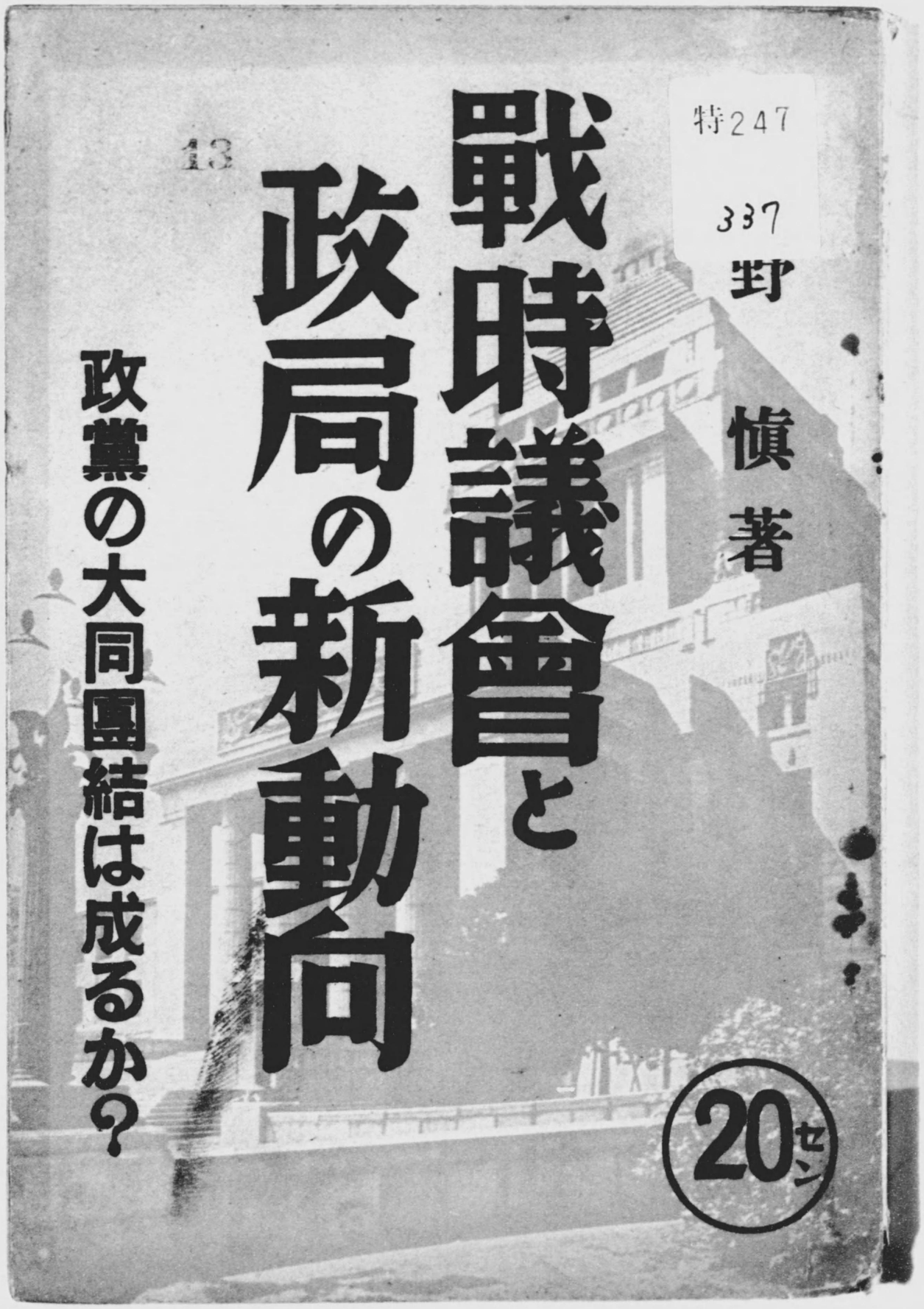

0004823000

0004823-000

特２４７－３３７

戦時議会と政局の新動向

大野慎・著

亜細亜出版社

昭和１３

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

特247
337

大野慎著

戰時議會と政局の新動向

亞細亞出版社版

目次

支那事變と政治工作……一
日本政界の變轉時代……四
追ひ詰められる既成政黨……一二
政黨政治と軍政變遷の回顧……二〇
なぜ軍部と政黨の摩擦が起つたか……三六
革新氣運を高めた林内閣……四六
七十三議會と政局の動向……五四
頭山翁等政黨合同に乘出す……六〇
政黨は何處へ行く……六五
時局の及ぼす政界への影響……六八

戰時議會と政局の新動向

大野　愼　著

支那事變と政治工作

我が日本帝國にとつて、未曾有の戰爭とも言ふべき支那事變も、世界戰史上稀に見る皇軍の武勳に依つて、北支五省は勿論、支那の咽喉部たる上海を手中に收め、遂に首都南京を陷落せしむることが出來た。

之に依つて蔣介石を中心とする國民黨政府が、イギリスやソ聯の尻押しに依つて、如何に長期抵抗の擧に出でやうとしても、既に彼等の運命は決定的なものと言ふことが出來

やう。

勿論戰爭は相對的なものであり、殊に今次の支那事變は、單純な對支戰爭ではないから、今後に於て、決して樂觀を許さぬとは言へながら、英國にしろソ聯にしろ、自ら武力をとつて楯突くだけの用意と覺悟を持つてゐない樣である。從つて、軍事工作は南京陷落を以て一段落となり、專ら政治工作に力を注ぐ時期に到達し、皇軍の實力の及んでゐる間に、東洋永遠の平和工作を確立しなければならなくなつたのである。

從來、我國は幾多の戰爭に於て、忠勇無双の皇軍が、赫々たる武勳を宣揚し、戰つて捷たざるは無かつたのであるが、遺憾乍ら戰後の外交工作に於て失敗の歷史を重ねて來た。

日清戰爭に於ては、戰後の三國干涉に依つて遼東半島を還附し、日露戰爭に於ても、我が國力の滿蒙進出は意の如くならず、世界大戰の結果、山東半島を獲得しても、戰後の外交政治工作に於て、之を還附したり、軍備の縮少をさせられたり、幾度か多くの犧牲を拂つても、我國の大陸進出は抑壓され來つたのであつた。

之は、もとより我が國力が、歐米列强よりも未だ劣位にあつた關係に起因し、我が國當事者の苦心の迹を推察するに難くないとはいふものゝ、一面に於て、餘りに歐米の思想や勢力を買過ぎた處に、より大きな因果の存在したことを否定することは出來ないであらう。

その結果、我が國は「戰爭には强いが、外交には弱い」との定評をうけねばならぬ、悲しむべき歷史を繰返したのであるが、之は政治的の力が弱かつたからで、後人に對する偉大なる敎訓だつたのである。

之等の事實に鑑照しても、今次の支那事變に對して、決して軍事工作に於て不安なしとしても、戰後の政治工作に於て、大いに戒心しなければならず、飽迄も堅忍不拔の擧國一體の精神を堅持し、いはゆる持久戰を覺悟して、善後處理の解決に當らなければならぬものである。

之がためには、國內における庶政一新も要求され、事變を轉機として、時局は急テムポに動くものと信ずるのであるが、殊に此の歷史的一新紀元を劃する支那事變下における今

次の第七十三帝國議會は、政界に胎動する幾多の暗流を清算する楔機となり、庶政一新、昭和維新は、事變といふ伴奏曲に、一層高調され、實際化されてゆくだらうと思はれる。

日本政界の變轉時代

明治維新以來の日本は、明治天皇の五ヶ條の誓詔を體し、「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フ」べき目的のもとに、舊來の陋習を打破し「智識ヲ世界ニ求メ」て「大ニ皇基ヲ振起ス」べく協心努力した。

その結果、僅か數十年にして、世界のあらゆる智識を粹め、外國文化の輸入によつて、大いに我國の躍進開化に急速的な刺戟を與へた影響は言ふまでもないが、その反面に於て、物質的なものにしろ、或は精神的なものにしろ、舶來萬能主義となつて、一切合切外國流に改めることが文化で、固有の眞善美を活現することが野蠻でゞもあるかの如き思想を抱くものが多くなり、國粹主義は、一般から「時代遲れ」と卑下され、或は「反動思想」

として排斥される傾向が著しくなつて來た。

この傾向は、遂には我が國體の萬邦無比なる所以を忘れ、却つて國體に對する懷疑的思想をもつて、自由主義國家の機構を意慾する者が少くないやうになつて來た。

殊に世界大戰以來、科學工業の急角的發展は、忽ち產業界、經濟界に一大變革をもたらすやうになり、資本の勢力が强大となるに及び、その反動として、デモクラシーが益々色濃く世界を風靡するやうになつた。

我國に於ても、歐米文物の輸入と共に、早くより自由主義が輸入され、デモクラシー文化が、一君萬民の皇國に花を咲かせるやうになり、泰西文化の支配を受けるやうになつた。

近代國家としての今日を爲せる日本が、世界文化の水平運動における所產と言へばそれ迄だが、兎に角、わが國體は、久しく舶來文化に蔽はれ、自らなる固有の道義は影をひそめてゐたのであつた。幸か不幸か、自由主義的勢力群の罪惡が累積し、それを機會とし

て、識者の間には、皇國日本の前途を憂慮し、我國の歴史を貫く皇道精神の再吟味を主張する者が多くなり、漸く特殊なる社會的環境を認識し、民族的大使命に自覺するものが日を逐ふて多くなつた。

搗てゝ加へて、滿洲事變以來、相次ぐ國際的諸問題は、政治的に、經濟的に、民族自決の精神を昂揚せしめ、日本主義の高濃化に伴つて、世界に比類なき國體の上に構成された、いはゆる民族的自主主義が擡頭するに至つた。

かやうな客觀情勢下にあつて、血盟團事件や五・一五事件等の如き血醒くさいテロ事件が起つて、政黨の單獨内閣は、犬養内閣を最後として崩壞し、政權爭奪に寧日なき政民兩黨が、互に政權の盥廻しを策すところの、いはゆる「憲政の常道」なるものは政黨者流の過去の思ひ出となつて了つた。

而して、犬養政黨内閣が倒れて齋藤内閣が出來たとき、政民兩黨と若干の官僚が聯合し、舊軍閥の殘存者が首班に据つて、いはゆる擧國一致内閣なるものが出來上つた。

齋藤内閣成立の意義は、政黨が甚だしく非難された結果、一時その反感を緩和せしめんとする中間的存在であつたことは、當時の齋藤首相自らの聲明によつて立證せられた處で、軈て政黨内閣へ還元せしむる寓意にあつたことは言ふまでもなく、從つて、この暫定的な中間内閣は、一定の主義主張を以て政策を遂行する能力も熱情もなく、いはゆるスローモーション内閣の名を恣にしたのであつた。

だが、政黨方面では、やがて往年の政黨内閣時代に還元すべきものと觀念し、之を庶成しつゝ甘んじて齋藤内閣に努力して、嵐の沈まる時機を待たんとした。

然るに齋藤内閣が瓦解するや、政權は再び政黨の門前を素通りして、岡田啓介大將に大命が降下したので、彼等はいさゝか焦燥狼狽の色を呈し、先づ政友會は入閣を拒絶した。

然れども、政友會が野黨に立たうが立つまいが、岡田内閣は新日本建設運動の潮流に乘つた革新内閣ではなく、齋藤内閣と同樣、自由主義聯合群の延長的勢力であり、之に反對を表明した政友會と同じく、ひとしく現狀維持派の一勢力でしか無かつた。

たゞ、齋藤前内閣と異つたところは、政友會といふ野黨を持つたことで、前内閣よりもその實行力を疑はれ、世人は之をノーモーション内閣と評したのであつた。偶々政府の補強工作を行はんとして、既成勢力を總動員した内閣審議會を組織しやうと意圖し、この計劃が三宅坂に於て樹立されたといふ風評が頻りに傳へられたのであつた。果してその風評が眞か否か知る由もなかつたが、かゝるデマが飛んでゐる折柄、三宅坂切つての人物と言はれた將軍が、部内の青年將校の手に斃され、軍部内に異常の空氣が流れてゐることを暗示したが、やがて岡田内閣は議會を解散し、喧々轟々たる中に總選擧を執行した。

その結果は政民兩黨の頭數が反轉したゞけで、既成勢力が依然として議會を獨占してゐるといふ事實が明らかとなつて間もなく、我が國空前の歴史的な事件である二・二六事件が勃發し、國體明徴問題の解決を澁つてゐた岡田内閣は、一瞬にして紛碎されてしまつた。

この不祥事件の後を承けた廣田内閣は、組閣當初、軍部から自由主義排擊の聲が掛つて、その成立を危ぶまれる程の一悶着を起したが、矢張り政民兩黨から二名宛の閣僚を入

れた。事變後政局はどう動くか？

それは内外の耳目をそばたてる處であつた。

政黨方面に於ては、閧として聲無かつたのであるが、依然として、齋藤、岡田兩内閣と五十歩百歩のものが出來上つたので、大いに安堵の胸を撫でおろして協力を誓つたのであつた。

併し乍ら、只ならぬ客觀的社會情勢は、政局擔當をして、徒らに時代の流れを堰止めさせやうとはせず、廣田内閣も、拔本塞源的な庶政一新の斷行を叫び、大いに國民生活の安定を計ることを、百遍繰返し聲明したのであつた。

凡そ如何なる政治家でも、政權を執るに當つて、庶政を改善し、國民生活の安定を期することを聲明せざるものはなく、非難の的となつた政黨が内閣を組織した過去を回顧しても、斷じて「國民生活の不安を計り、財閥資本家の利益を擁護する」と聲明した例はなかつた。

併し乍ら、從來政黨內閣の聲明は、殆んど信賴するに足らずとなし、それが國民の反感を招致せる原因ともなつたのである折柄、事變後の緊迫した客觀情勢下における廣田內閣の「庶政一新」なる聲明は、今度といふ今度は……といふので、國民大衆の腸にグッと泌み込んだのであつた。

それにも拘らず、現狀維持派と抱合つてゐる廣田內閣は、容易に政策を實施に移行することは出來ず、あれやこれやと氾濫する政策の取捨撰擇に迷ひつゝ、三十億圓の尨大なる豫算案を作成して第七十議會に臨んだのであつた。

處が、最初廣田內閣に協力した筈の政民兩黨は、かやうな革新政策を通過させることは不可なりとして、愈々議會開會となるや、現狀維持派の傀儡たる本能性を發揮し、積極的に反撥を見せるに至つた。

一方軍部は、三十億圓の豫算案に包含された國防豫算を中心とする革新政策を、どうしても實現せしむる强硬なる態度を持してゐるので、政黨と軍部との對立抗爭は愈々表面的

に激化し、遂に廣田首相のネバリ强さに依つても收拾不能に陷つて瓦解し、大命は萬年首相候補と謳はれた宇垣大將に降下したが、宇垣大將こそは、元老、重臣、政黨財閥の聯合したる自由主義的反動勢力であり、時代の齒車を逆轉するものとして、軍部を始め、革新勢力の强硬なる反對に遭遇し、多年潛勢力を培つてゐた宇垣大將も、組閣不能に陷り、敢なくも流產となり、代つて林銑十郎大將が政權の拾物をしたのであつた。實に第七十議會を中心とする我が政局の動きは、大きく弧を描き、躍轉飛動のテムポを速めたもので、近代日本の急角的動向を大きく將來に示唆したものといふべきであつた。

追ひ詰められる既成政黨

さて林內閣は、政黨から閣僚を取らず、黨人としては昭和會を形式的に離した山崎達之輔を一枚加へたに過ぎず、一人二役の閣僚が澤山出來て、數人の閣僚を以て成立せしめたお粗末なものだつたに拘らず、大いに革新を斷行する底の色を見せたが、何しろ議會開期

中の政變なので、具體的な政策の持合せもなければ、作り上げる暇もなく、顏面筋肉を硬直させた林大將は、祭政一致を說いて、自由主義政黨者流を煙に卷いたものだつたが、第七十議會の最終日、突如として拔打的な解散を斷行した。

勿論議會の解散といふに就いては、如何なる場合に於ても、之を文句なしに甘受するものはなく、立憲的だ、非立憲的だの口角力はお定まりの景物詩であるが、殊に豫算案も無事通過させた最終日の解散といふ藝當は、世上幾多の議論を捲起すに充分であつた。

組閣以來、閣僚の補充も出來ないので、早くも弱體內閣と評された林大將も、こゝに於て、議論の是非は何れにもせよ、仲々やるもんだわいの印象を深め、首相の强硬なる時局對策も再檢討するの價値があるとさへ傳へられるに至つた。と同時に「政黨は益々追詰められる」の感を深くし、彼等が解散の日、それぞれ本部に引上げて叫んだ「萬歲」の聲には心なしか挽歌に似た悲鳴が交響し、流石に一掬同情の涙を禁じ得なかつた。

林大將は、軍部に流るゝ潮流を汲んで、相當な革新的政策を斷行するのではないかと見る向きがあつた。そこに現狀維持にとつての危惧の念を匿すことが出來なかつた。

一方革新派は、林大將も案外なるロボットで、結局政黨と妥協するのではないかとの觀察を下してゐたやうであつた。區々紛々たる褒貶裡に立つ政府閣僚の、議會に於ける一擧手一投足が、異常の注目を惹いたことは事實であつた。

前にも述べたやうに、此の內閣は議會開期中に生れたもので、廣田內閣の編成した豫算案を踏襲して議會に臨んだのである。いはゞ衣裝萬端借用に及んで勸進帳を讀んだのである。三十億の馬場財政を、結城藏相が二十八億一千三百九十三萬七千圓に削つたのは、着物の寸法を、若干詰縫ひして間に合はしたといふ譯であつた。

だから、林內閣の抱負經綸といふものは、之を具體的に知ることが困難だつたので、この借衣を着て、どう踊りこなすかに依つて、踊り手の素性を知らうとし、大いに注意を拂つたのは人情の然らしむる處であつたが、その聲明書が祝詞的な抽象文字に列ねられて、一般に理解されなかつたやうに、依然としてこの役者の素性を認識し難つた。寧ろ政黨の

反對に對する無抵抗主義は、弱體ロボットの本能ではないかとの觀測さへ行はれた程だつた。黨人機を見るに敏なること支那兵の如く、相手の顏色を讀むこと馬の如きものがあつた。

けれども、たとひどうあらうとも、一たん政權を握つた以上は强大なる權力があり、然も曩に廣田內閣の場合は、內閣自身が退陣したけれども、今度は內閣が投出すといふことは殆んど考慮外であり、理論的にも實際的にも、大上段に斬つてかゝれば、解散必至の蛇となるので、政黨を否認されても、之を正面から「不信任案上程」として應酬も出來ず拔き足さし足、巧妙に解散を回避し乍ら、內閣を窮境に追詰めやうとしたのであつた。

その策戰は、豫算案を通過させて先づ政府をして安堵せしめ、巧妙に議事を引延ばして、最後に重要法案を握潰してやらうといふ魂膽であつた。

無產大衆の期待する國民保險法案は、政府としては、社會政策的な法案として、大いに之に力瘤を入れたに相違ない。政黨の喰ひ下つたところはそこにあるのであつて、之を握潰

しとして政府の面目を丸潰しとなし、おまけに政民兩黨合作の選擧法中改正法律案なるものを、多數決を押して通過させやうとした。

選擧の腐敗墮落は議會政治の腐敗墮落であり、選擧肅正は最近における我が國の政界を淨化せんとする國民運動たらん傾向をもつてゐる。

それにも拘らず、何時の選擧にも違反者續出し、選擧界の穢氣邪流は容易に芟滅し難きを深憂する者多くなりつゝある折も折、黨人の勝手極まる御手盛案で之を改めやうとした處に、政黨者流の思潮に對する盲目たるの譏を受ける理由があつた。

最近議會政治の行詰りから、ファッショ政體を意慾する向もある。ファッショは眞個の日本國體觀念に自覺する者にとつて、その儘日本に移すべきではないと思ふが、兎に角、多數決主義を唯一の便法とするデモクラシー政治機構を、絕對に正當なるものとして、民主國家の政治思想に生きる者にとつては、政黨政治を排擊する後から、ファッショが表れるものと觀念し、いたくこの傾向を恐れ戰く向きが少くない。

林大將も、政黨からの入閣を許さず、革新政治を斷行せんことを揚言したので、それは漸進的にしろ急進的にしろ、近く行政機構の改革を行ふであらうことを意識しない譯にはゆかなかつた。

そこで、政府に先手を打たれ、政黨者流の手足を縛られるのではないかの惡夢にうなされ、いさゝか寢醒めが惡いので、議會の多數決といふ便宜主義が物を言ふ間に、巧利的な手段に訴へたのが選擧法の改正案であつた。尤も、現行選擧法といふものは、斷じて改正しなければならぬ代物であつて、現行法が物を言ふ限り、地盤、看板、鞄の既成政黨乃至は既成政黨型の議員が出られるやうになつてゐるのであるから、改正するとせば、有爲有能なる人材が選出され、國政と參與される機會を解放する樣に致さねばならぬのであるが、政民兩黨が改正せんとするのは、この時代思潮を受入れやうとするものではなかつた。換言すれば、政黨の勢力を維持するに都合のいゝ制度を目標としたものであつた。

そこに維新勢力と現狀維持派との摩擦を激化せしむる因子があり、どつこいその手は桑

名の燒蛤と考へたか、政府は最後の一瞬にして、解散の早業をやつてのけたのであつた。

猫ぢや猫ぢやと、忍び足で近寄つて見ると、豈計らんや朝鮮降りの虎であつた。ビンとはねあがつた虎ヒゲをしごく林大將、解散を主張して、政治は素人だとうそぶく海相米內大將の策戰は、政黨人をして茫然自失たらしめ、或は憤然激昂せしむるに充分であつた。

「軍人は單調で策や駈引きが無い」などゝ言ふのは、繪心のない人の囈言で、兵法を學ぶ軍人の方が、或場合には策戰駈引きが遙かに上手である。

それはそれとして、第七十議會解散の事情は、大體以上の點に重心があつた樣で、解散當日の午後、首相官邸に於て林首相の發表せる所信聲明なるものにも、此間の消息を物語つて居る。而して林首相は、同聲明書の中で、最終日になつてから、始めて政黨に對する觀念をはつきりと把握し、こゝに解散を決意したと言つてゐるのだが、それは組閣當初から政黨との正面衝突は豫て覺悟の上であつた筈だ。何しろ政黨から入閣するに當つては離黨を條件としたのだから、明らかに政黨排擊の意圖を表明したものであつた。然るに當時

における政黨は、別段護憲運動も起さず、議會に於ても不信任案を叩きつけることもなく、媚然として跟隨するかの態度であつた。

そこは林大將の林大將たる所以で、曾て彼が陸相時代における態度の如く、當初强い一手を打つて、あとは執拗に排擠を續けなかつた。處が、政黨は案外に强がりを言つたものゝ、結局政黨を叩くだけの勇氣と用意が無いとの診斷を下して、巧妙に解散を回避し乍ら、政府をして頓死せしめる擧に出たのである。

之を林首相に言はせると、

「組閣當初に於て政黨を排擊したに拘らず、議會において今日まで政黨と協力せんとして努力して來たことは、政黨の自制によつて、何とかやつて行けると感じたからだ。然るに議會の終り頃に於て、政府側の誠意を披歴して、各重要法案の通過に努力したに拘らず、一向政黨側の誠意の見るべきものなく、寧ろ或る點については組閣當初の認識より一層深刻になつたといはざるを得ない。豫算を通して解散をやつたことに對して、色々議論もあるやうだが、結局政黨側の議會最終日に當つて示した不誠意のしからしむるところであると考へる。ともかく自分の政黨に對する考へは、この議會解散により組閣當初の氣持に還元したとも言へる。要するにこの時局打開のためには、官民一致政府も政黨も時局に對する認識を一にして邁進すべき秋であると思ふ。」

と言ふのであつた。最初は政黨を排擊して反省を促し、政黨が反省するならば、釋然として協力するも敢て不可とせざる程度に林首相の肚裡は動いたやうであつたが、どうしても自由主義政黨は自由主義政黨としてのイデオロギーを一歩も讓らず、飽迄も現狀維持勢力の走狗的本性を顯現し反撥して來たので、遂に斷乎たる處置を講じたといふのであつた。

曾て滿洲事變突發當時「越境將軍」の勇名を轟かしたのは林大將であつた。其後大將は中央に入つて教育總監の要地に就き、陸軍大臣となり、二・二六事件當時豫備役に入つたが、思はざる政權擔當者となつて、政黨を向ふに廻して一戰を挑んだのであつた。その元氣は多とするも、實際問題としては容易なことではなく、殊に政界の上層部には、越境將

軍の革新工作を不快とする向きが少くないやうであつたので、總選擧後、特別議會をも開くことが出來ず、遂に林大將も投出して近衞内閣となつたのであつた。

政黨政治と軍政變遷の回顧

去る大正十二年九月一日に起つた關東大震災には、恰も加藤友三郎内閣瓦壞の後なので、餘震未だ熄まず、帝都は炎々と燃え上つてゐる翌二日、第二次山本權兵衞内閣が成立した。山本内閣は、大震災の後仕末をなし、帝都復興に頗る淬勵したにも拘らず、同年末共產分子による虎ノ門事件といふ不祥事件が起つて引責桂冠した。

政黨單獨内閣の序幕として、政黨者流が我世の春を謳歌した原内閣は、一青年の兇刄に倒れて以來、加藤、山本といふ非政黨内閣が續いたので、山本内閣が瓦壞した時、今度こそは……と手具脛引いて待つたのは第一黨の政友會であつた。

處が捕らぬ狸の皮算用は見事に外れて、清浦内閣が成立した。政黨者流は「これこそ政黨を無視する特權内閣」として、猛然奮ひ起つて護憲運動を起し、政友、憲政、革新三派聯合して倒閣運動に火の手を擧げた。

政權に近づくためには、恥外聞を顧慮せぬ床次竹二郎が、政友會から逸脫して政友本黨を組織し、清浦内閣の與黨となつたのは此の時で、政府は直ちに四十八議會を解散し、十三年五月總選擧を執行の結果、政府黨一一二、反對黨二八三、中立六九といふ狀態で、流石の清浦特權内閣も退却せざるを得なくなり、僅か半歲の短命で投出し、加藤高明を首班とする三派聯立内閣が出來たのである。

而して清浦内閣の陸軍大臣として登場したのは宇垣一成大將で、續いて加藤三派内閣に居據はり、爾來加藤單獨内閣、若槻内閣と、宇垣陸相の一人舞臺で軍政を掌握し、昭和二年田中内閣が出來て、陸相の椅子は故白川義則大將に讓つたが、田中内閣倒れて濱口内閣成るや、又もや宇垣陸相の再登場となつた。

其頃、大戰後の歐米自由主義國から宣傳されるデモクラシー思想は、益々濃厚に我國内

を風靡し、その政治思想を金科玉條とする政黨は益々强大なる勢力を扶殖し、天下あげて政黨色に塗りつぶされた感があつた。

彼等は、ユダヤ人の操る英國や、革命以來フリーメーソンの秘密結社に支配される佛蘭西あたりの議會政治と政黨との關係を直譯模倣し、何も彼も自由主義一點張りの物眞似をなし、英米あたりの國際平和主義に醉はされ、ワシントン、ロンドンに於ける軍縮會議に參加して、統帥權干犯の由々敷き問題までも踏み越えて、屈辱的な條約に調印し、徒らに白人の優越感を昂揚せしめ、同時に國防の安全感を缺くやうな政治を强行した。當時之に反對を表明したのは軍令部長の加藤寛治大將と、次長の末次信正中將とであつた。末次中將は後に大將となり、身を以てこの條約による國防の缺陷を補はんとし、非常時日本の海の生命線を護る名提督としての名を馳せたのであつたが、今は丸腰となり、近衞內閣の內務大臣として、大いにその抱負經綸を行はんとしてゐるのは、政黨人にとつて益々意想外なる政界の雰圍氣を醸成するものとしなければならぬであらう。

兎に角、永らく軍政を掌握してゐた宇垣大將は歐米のデモクラシー宣傳の波に乘つて、軍縮熱に浮かされた政黨と調子を合はせ、陸相當時、量に於て四ヶ師團を減らし、中將四人、少將十二人、佐官百五十餘、名尉官七百餘名を一變に淘汰したことは、世人の記憶する處であらうと思ふが、當時の軍事豫算は減額されるばかりであつたから、新兵器を採用して、質的改善を施す筈の國防計畫も、模型の戰車、竹細工の機關銃で練兵するといふ風であつた。

之は單に國防計畫を不完全たらしめたばかりでなく、思想的にも大きな影響を及ぼし、軍人を白眼視する傾向をさへ見るやうになつた。練兵場は削り取られて賣拂はれ、將校集會所は修理費が乏しくて廢墟のやうになつたのも其頃で、若い一徹の將校達が卓を叩いて悲憤慷慨したのも其頃であつた。

又海軍に於ても、五・五・三の比率を甘受して、世界の平和機構を確立するに寄與し、一面に於て國民の負擔を輕減することを宣傳し乍ら、その條約に調印して歸朝せる者を、

一代の英雄の如く吹聽し、歸朝早々男爵授與を奏請したのは濱口内閣であつた。この男爵は、今尙爪を嚙み乍ら政界の最上層部に頑張つてゐることは注目すべきであるが、當時に於ても軍縮問題を繞つて、國論は漸く沸騰しつゝあつた途端、偶々濱口首相は、東京驛頭に於て刺客に殪され、第二次若槻内閣が出來上つた。

かくて軍部中央部に拔くべからざる勢力を扶殖した宇垣大將は、省みて政黨人の傀儡となつたことに、自ら寢醒めが惡かつたか、間もなく現役を退いて朝鮮に隱居し、第二次若槻内閣には、巨體をゆすぶる南大將が、豪傑笑ひをし乍ら軍政掌握のバトンを引受けた。

既に歐米追隨一天張りで、平和だ、自由だ、軍縮だと浮かれ出してゐては、國權の伸張は期し難く、ソヴエート・ロシヤは極東方面に根を張り、支那軍閥の跋扈は、滿蒙における我國の權益を蹂躙し、支那に於ける在留邦人の生命財產は風前の燈同樣となり、やがて南京事件が起り、九・一八事件が起つた。

時恰も國内に於ては、ロンドン軍縮條約の不當を難詰するの聲が、憂國の志士に依つて叫ばれ、横車を押す政黨は、國策長計を考へることなしに、黨利黨略の狂奔と疑獄、醜惡事件の濫出で、國論とみに騷然を極め、滿洲には戰車が動き、重爆擊機が飛んで天地鳴動するや、若槻軟弱外交は時局を收拾すること不可能となり、安達内相は政爭を止めて政黨聯携を提唱したが、目先きの暗い黨人の容るゝところとならざるのみか、却つて倒閣の陰謀呼ばはりをされるに至つて、昂奮の内相安達謙藏も抱合無理心中をやつたので、玆に脆くも若槻内閣は逼迫せる時局をよそに崩壞した。かくて政權が何處へ行くかは注目の的となつたが、第二黨たる政友會に大命降下し、犬養木堂老が艱難なる時局を擔當することになり、軍部に於ける日本主義者として有名な荒木貞夫中將（間もなく大將に昇進す）が陸相として登場した。荒木將軍の出馬は、三宅坂の空氣を一新したばかりでなく、その思想的影響は大きなものがあつた。

犬養内閣は、成立後即ち昭和七年一月、第六十議會を解散し、不景氣は民政黨の消極的緊縮政策に依るものだとなし、未曾有の毒舌をふるつたスローガンを掲げて總選擧に臨ん

だので、不景氣は世界的で致し方ないと拱手傍觀的政策を持した民政黨の天下に、多年疲弊困憊し切つた國民は、かすかながらも一縷の望みを囑して、與黨三百四名といふ空前の結果をこの總選擧に示した。民政黨の前藏相井上準之助が、血盟團に殪されたのは此の總選擧最中であつた。

思はぬ反動の波が押寄せて、空前の拾物をしたのは政友會で、信州あたりの別莊からノコ〳〵と出て來た犬養老人も、彼等にとつては、昭和の花咲爺として、隨喜の涙に泪ばしめたのであつた。

この內閣によつて登場した荒木陸相は、從來の宇垣などと違つて、遠大なる經綸と、盛になる愛國思想を抱持し、滿洲事變に依つて昂奮せる國民の愛國心を喚起し、自由的政黨政治の弊風を一掃しやうとする意圖を有してゐた。

荒木陸相こそ、革新氣運をリードする非常時日本の英雄として、國民の人氣を一身に蒐め、ゼネラル・アラキの偉名は內外を風靡したのであるが、血盟團事件が起つて、政黨人が我世の春を謳歌してゐる氣持ちとは異つた空氣が社會に流れ、折角三百餘名の代議士を逸出したに拘らず、前內閣の秕政を批判することに努力し、國民の期待する政策實行の誠意が無かつたので、荒木陸相は屢々政府を說いて、軍部の意圖するが如き革新的な政策の實行を希望したのであつた。

然るに政黨方面では、かくの如く三百餘名の黨員を占めるといふことは、依然として政黨に人氣があるのであるといふ觀念から、軍部が政治にかれこれ干與することは不當であるとの見地に立つて、陸相の容喙を峻拒すると共に、飽迄も黨略本位に邁進し、自由主義の大提灯をつけることに鋭意努力した。間もなく突發したのは五・一五事件で、急進分子の問答無用なる兇變に依つて、犬養內閣は政黨內閣終幕となつて崩壞し、中間的な齋藤內閣が出來上つた。

天下萬民誰が見ても、此の內閣も自由主義的色彩に富む既成勢力の總動員的合作であるとなし、殆んど革新政策を行ふなど思ひも寄らぬ存在であつた。陸相として此の內閣に居

据つた荒木大將は、途中病氣を理由に退陣した。

荒木は退却するに當つて、教育總監たりし林銑十郎大將を病褥に招き、後任に軍事參議官眞崎甚三郎大將を推薦した。林總監は小田原に赴き、閑院參謀長宮殿下の御裁斷を仰ぎ、直ちに歸京して軍事參議官會議に諮つたが、其結果は荒木の希望は容れられず、林が陸相となり、眞崎が教育總監に決定し、こゝに林軍政時代に入つたのであつた。

元來林大將は、曾て乃木將軍の麾下に在つて、其の德化に浴し、川合清丸翁に私淑した人であり、軍政を統督する柄ではなく、寧ろ野に置け攻城野戰の將器であり、政界に毅然たる一介の武辯であつた。

彼は陸相に就任早々六十五議會に臨んだのであるが、その雄辯とゼスチュアに於て荒木に及ばぬにしろ、どこかに武將らしい溫容さと威嚴を備へてゐた。

荒木が三宅坂で頑張つてゐた時代は、政黨者流もいさゝか肩の凝るのを覺えたやうであつたが、荒木去つた後の林軍政に對して、いさゝかホッとした形であつた。然れ共、林が

議會に於ける答辯や態度を見ると、荒木に比して卒直簡明で寸分の隙がなく、犯し難き枯木寒巖のごとき彼に對しては、親しまんとして親しむ能はず、近寄らんとして近附き難きものがあり、結局軍部は軍部、黨人は黨人といつた格好で、黨人は聯合して軍部に應對せんとする氣運を濃化せしめ、聯合勢力の重壓によつて、彼をして軍部內の革新勢力を掃攘させやうと策動した。

かゝる空氣があつた折柄、國體明徵問題が起つて、美濃部博士の自由主義的帝國憲法の曲解が、國體擁護派から糾彈され、齋藤內閣は頗冠りで通らんとした。然るに帝人事件が起つて、更に中島商相の尊氏禮讃問題が起り、政局は限りなき紛淆と騷擾を極め、現狀維持の鉄釘たる齋藤內閣も遂に失脚し、計らずも後繼內閣の首班者として、角筈の陋巷に酒を置いて政治を放談する、岡田啓介大將に大命が降下し、世人をして呆然たらしむるものがあつた。

政友會は、今度こそは鈴木喜三郎に政權が來るものと信じ、時代の底に流るゝ流れを知

らぬ彼等は、氣の毒にも陰膳据えて、今や遲しと待ちあぐんだものだつた。當てごとゝ何とかは向ふから外れるとの御多聞に洩れず、折角の皮算用も僅か一瞬の夢と消えて終つたので、憂憤やる方なく、たちどころに岡田内閣に反對を表明した。

齋藤内閣當時だけは、乙にすまして一丸となつたが、早くも掌を返すやうに仲間喧嘩となり、岡田内閣も出足を挫かれたが、大臣なら何でもいゝといふ手合ひが政友會から飛出したので、辛うじて成立を見るに至つた。

齋藤内閣の後半、荒木大將の後を承けて軍政を掌握した林大將は、この内閣に居据つたのだが、彼は客觀的か主觀的か知らず、陸軍の中堅將校層から多大の信任をあつめてゐると言はれた、眞崎教育總監の辭職を強要した。陸軍三長官の一たる教育總監を動かすことは、よしんば法令上には違背するところなしとは言ひ乍ら、殊に眞崎大將の如く、非常時日本の第一線に大きな影を曳いてゐる人物を、陸相が異常の昂奮裡に黜陟するといふことは、餘程の重大問題でなければならない。當時政黨を中心とする現狀維持派からは、軍部内の革新派を一掃させん意圖のもとに、肅軍工作を要求し、政治不干與を提唱するところがあつた。かやうな環境下に、眞崎將軍黜陟を力行した林は、その手段に於ては越境將軍たるの面目をさらしたのであるが、その半面に於て、如何に彼が政治的眼光に乏しい一徹短慮であつたかを暴露したものであつて、三宅坂あたりの騷然さは、却つて時局を複雜化し、急進分子を尖鋭化した感があつた。

やがて間もなく、林陸相の智囊といはれた永田將軍は、不測の兇刄に斃れるといふ不祥事を見るに至つた。林は之に依つて陸相の地位を去り、代つて軍部に於ける派閥の埒外に超然たりし川島義之大將が登場し、二・二六事件まで、多岐多端なる軍政の局に當つたのである。

此の事件に於て、内大臣齋藤實、大藏大臣高橋是清、教育總監渡邊錠太郎の三氏が犧牲となり、陸軍では林銑十郎、本庄繁、荒木貞夫、眞崎甚三郎、川島義之、阿部信行の六大將が責を引いて現役を去つたので、陸軍は大將になりたての寺内壽一伯と、武藤元帥の亡

後關東軍司令官として渡滿せる植田謙吉大將が首腦者となり、俄かに寂莫を感ずるやうになつた。

事件の後を承けた政局は愈々重大で、一歩過れば取返しのつかぬことになるので、西園寺元老は極めて愼重な態度で入京し、愈々とつておきの候補者たる近衞公を後繼首相に推薦したが、公は健康上の理由で辭退したゝめ、お鉢は外相廣田弘毅氏に廻つて、廣田は難局解決の大任を帶びて組閣に着手したが、陸相として入閣することになつた寺内大將は、傳へらるゝ廣田内閣の顏觸れが、餘りにも時代思潮に錯誤するものありとなし、自由主義排斥の聲をかけたので、組閣本部は俄かに動搖を來し、漸く顏觸れの變更を行つて成立と漕ぎつけたのであつた。

二・二六事件は、各方面に種々なる影響を與へたことはいふまでもないが、就中支那に與へた影響は大きかつた。

即ち、日本の軍部は二派に分れて抗爭し、事件に依つて革新派が總崩れとなつたと觀察したのは諸外國人であつた。支那を植民地化さんとし、永らく排日思想を宣傳してゐた英國が、日本は弱くなつたと宣傳し、侮日思想を煽つたので、種々なる抗日テロ事件が起つたのは廣田内閣當時のことで、之等テロ事件に對する對支交渉は迷宮に入つたかの觀があつた。

兎に角、對外關係は國家の實力を背景として行はねばならぬが、三宅坂からは、渡邊大將ともに七大將を失ひ、加ふるに、新たに登場せる寺内大將は、その溫容なる人柄が反映し、且つ廣田内閣自體が、拔本塞源的な庶政一新を斷行する旨を聲明し乍らも、一向實際化さぬので、支那は益々日本を甘く見る傾向となつたのであつた。

やがて廣田内閣も瓦壞し、大命は宇垣大將に降下した。

元來宇垣大將は政變毎に後繼首相候補者として囑目され、政界の動向と宇垣大將の動きは、頗る注目されつゝあつたのであつた。

併し乍ら、革新勢力は、舊軍閥政治家が、政黨や財閥と聯合する宇垣系勢力の進出は大

いに警戒しつゝあつた處で、宇垣も出るべくして容易に出られなかつたのであつた。

偶々二月事變に依つて、宇垣の進出を峻拒した勢力は減退したものと判斷したものが常識であつた。

然も、從來その眞僞は別として、寺内、杉山、二宮三將軍は宇垣大將系の三羽烏といふ批評をさへ受けた程だつた。革新派が中央部を占めてゐたとき、之等三中將は、大阪、廣島、熊本の師團長となつて、都を遠く離れてゐたのであつたが、軍部の統制だ、肅軍だといふ聲が出ると共に、二宮治重中將は豫備役となつたが、寺内、杉山は中央に戻つて、七大將總退却の後を承けて三宅坂の重鎭となつた。寺内は大將となつて教育總監から陸相となり、杉山もやがて大將となり、教育總監の要職に就き、二宮は鮮滿拓殖會社の總裁となり、何人が見ても宇垣内閣の出來るであらうといふ觀測を許されるに至つた。

一方寺内陸相の肅軍工作も着々と進められ、事件關係者の處斷も一氣呵成に運ばれたので、政界に於ける宇垣派進出の空氣は漸く色濃くなり、宇垣將軍も多年の朝鮮統治から足

を洗つて歸京したのは、身構への準備なりとして、大小策士は縱横に飛躍するやうになつた。

果せるかな、廣田内閣が、軍部政黨の摩擦にあふられて倒れるや、間髪を入れず、政權のバトンは宇垣大將に引渡された。

之は元老重臣方面が、時局の底に流れる流れを、必要以上に甘く見てゐたことは、その結果から見て論斷することが出來たのであるが、軍部内に制へつけられてゐた空氣は、宇垣に政權降下を見るや發火點に達し、未曾有の紛淆を極めて、流石の宇垣大將も揉み潰されて了つた。

此の紛爭に於て、寺内、杉山兩將軍が、屢々宇垣大將に大命拜辭を要望した事實は、如何に三宅坂が雰圍氣が激烈であつたかを看取するに充分であつた。

やがて大命は林大將に下り、林内閣となつてからは、寺内は教育總監に退き、杉山大將が軍政を掌握し、杉山は近衞内閣に留任となつたのであるが、偶々支那事變が勃發し、政

黨も舉國一致の體勢をとらざるを得なくなつたので、政黨だ、軍部だの摩擦は解消したものゝ、政黨も從來の儘の形、從來の儘のイデオロギーで進んでゐるならば、全く時代に置去られる無用の長物となるので、昨今政黨の大同團結運動が擡頭するやうになつたのである。

なぜ軍部と政黨の摩擦が起つたか

岡田内閣は齋藤内閣の延長であつたことは、世人の一致した見解であつた。

齋藤内閣では、頻冠してその解決を澁つた機關說問題も、この内閣時代に入ると、一層猛烈な議論が沸騰し、遂に政府も何等かの意思表示をしなければならない狀態に逼迫した。恰も政友會は、在野黨たるの立場から、巧みにこの問題を取上げて衆議院で糺彈するに至り、彼等が、よしんば倒閣の具に供する不純な意圖を内潛せしめてたにせよ、兎に角機關說排斥問題は、岡田内閣にとつては厄介な癌となつた。

外にあつては在野各方面の國體擁護團體が、皷を鳴らしての果敢なる活動となり、議會にあつては攻め寄られ、閣内に於ては軍部大臣から解決方を促されたので、流石に心臟の強い岡田大將も洒蛙々々もならず、第二次の聲明書を發表した。

然し、人事的には一切手を觸れず、當時の一木樞相を始め、背後の重臣群に累を及ぼすことは、畢竟自己の安危に拘る重大問題なので、之が自衛的戰略上、危きに近寄らざらんことを念ずる岡田は「鰐面に水」の句を放言して取濟ましたのであつた。水に在りては三軍を率ゐる岡田提督も、陸にあつては鰐と同じく無學無能であつた。

機關說問題は、美濃部博士より轉じて重臣方面を對象とする政治問題となつたが、商才に長じた政友會の久原房之助が、その才略才能を應用して、重臣ブロックの排擊を叫び、二三流財閥の憤憤を霽らして得意になつたのも其頃で、後日二・二六事件に連座の嫌疑を問はれたのも、かうした關係から左翼團體との脉絡を通ずる動機があつたであらうと思ふ。

かくて政局は益々複雜混亂してその歸趨を知らず、讒謗、怪文書は亂れ飛び、議會に於ては床次逓相の五十萬元問題や、種々雜多の餘興があつて泥合戰となり、首相岡田大將は「擧國一致の期待が外れた」ことを理由として、六十八議會を休會明け劈頭解散した。

昭和十一年二月二十日、第十九回の總選擧を執行の結果、民政黨及び昭和會を與黨とする政府は、ホッと吐息する程度の辛勝で、國體明徵問題の議論も雲散霧消せしめ、總選擧の結果が判明したばかりの同月の二十六日、空前の不祥事件が突發して、遂にあの結果を見るに至つたのである。我等は、めつたに此の事件の是非を論すべきではなく、すべては後世の史家に讓るべきであるが、たゞ打つた者に對しても、打たれたものに對しても、共に萬斛の涙を注がざるを得なかつたのである。

而して、岡田內閣が、多少なりとも革新政策實行に努力し、國體明徵に熱情を示すならば、かゝる不祥事件も、或は未然に防止し得たであつたらうと考へる。政治は一部階級の御用だけを努める如き民主國家の政黨が行ふ政略であつてはならない。時代の底に流るゝものを汲上げる透徹した眼光識見と、之を實行する能力と誠意が無ければならない。そんなことは悔ひても間に合はないといへばそれまでだが、後人は之等の歷史の中から、一つの眞理を學ぶことが出來れば、禍も轉じて活きた敎訓となる譯である。

以上述べ來つたところを見ても分るやうに、大正時代の政黨全盛期から昭和初期へかけて、政黨は自由主義的デモクラシズムの本領を發揮し、軍部を抑制し、軍縮を斷行して、舶來の平和主義の美酒に醉はされて、自由、平等を謳歌しつゝあつたのである。

この時流に投じ、政黨と協力して軍縮を强行したのは宇垣大將であつた。

もちろん宇垣大將と雖、惡意があつた譯ではなく、彼一個の力に依つて行ひ得るものではないのだから、國力を減殺し、白人の支配に任せやうと意識的にやつてのけたとは思はれないけれども、當時に於ても、國家存立の上から、かゝる軍縮に反對の論議が軍部にも民間にも行はれてゐたのであるから、宇垣大將たるもの、世界の大勢に通じ、國家百年の將來に對する眼識と確固たる無私の信念に生きるに於ては、身を賭しても政黨者流の歐米

追隨策に反對すべきであつたが、それを爲し得なかつたゝめに、眼先きが晦くて黨人に盲從したとの譏を免れ得なかつたのである。且つ今日に於ても、その抱擁力に於て、その經歷に於て、その廣汎なる連關を持つことに於て、當代隨一と言はれる將軍が、遂に政權の空手形を見せられるに至つた所以は、時代思潮とかけはなれた自由主義者たるの判斷を下される理論的根據がそこにあつたからであらう。

軍部の中樞に君臨すること久しく、不拔の勢力を扶殖開拓した彼であり乍ら、若い部下の一齊射擊を浴びて、脆くも多年の宿望一朝の露と消え果てたことを思ふとき、昨日の淵も今日の瀨となる、飛鳥川のごとき人の運命を果たして誰か知り得るであらうか？

たゞ、國體觀念に深く根ざして、俯仰天地に愧ぢざる行動をなすものゝ精神のみが、永遠に光りを放ち、自己の名譽慾や利害のみを行爲の理據とする者は亡び易いといふ事實を、我等は此處に於ても學ぶことが出來るのだ。

それはそれとして、山梨半造大將や宇垣一成大將等によつて、政黨や財閥と共にデッチ上げられた軍備縮少が、その補充でさへも容易でないのは、今日の國防充實計畫であつた。世界各國における形勢は、當時と今日とでは甚だしく相違してゐるといふ事實も認めなければならないが、政黨者流が依然として自由主義的イデオロギーに立つてゐるといふことは、非常時日本、躍進日本、世界の上に立つべき一大轉換期に直面した今日、國家のために惜しむべき處であつて、政黨が軍部を支持するのではなく、政黨が國策遂行の大計を樹立して、軍部を指導する位の程度に、そのイデオロギーや組織を清算するのでなければ、政黨が國民の支持を受けることも、政權に近づくことも不可能であらう。

山梨や宇垣軍政時代までは、軍部は殆んど政黨に抑へられ、特色づけられてゐた恰好であつた。然るに荒木軍政時代に至つて、軍部は政黨や財閥に支配されぬ毅然たる皇軍であるとの自覺を持つやうになつた。同時に、政黨の性能をよく研究辯別するだけの眼識を持つやうになつた。

然も國内に於ては、經濟界の恐慌から幾多の社會問題が突發し、殊に左翼思想が浸潤し

て、遂に虎ノ門事件の如き大不祥事が突發し、農村の窮乏殊の外ひどく、之等の子弟は軍隊に入つて、國家の干城たるの教育を受けるに當つて、後に殘る家族の窮迫を思ふとき、彼等が爲政者に對して「もう少し何とかならぬものか」を要望したのは無理のないことだつた。そこに政治がある筈であるのに、當時の爲政者は、口を開けば「世界的の不景氣で如何とも致方なし」と手を拱いてゐたものであつた。そこで不平不滿の氣は軍隊内に漲るばかりであつた。かて〻加へて、軍備縮少、經費削減、緊縮節約といふ消極退嬰の政治は、一身を捧げて大政翼賛の任に當る軍人に對して、如何なる思想的影響を與へたかは、説明するだけ野暮であらう。

此間にあつて、極東に積極的に進出して來たソヴエート●ロシヤは、滿蒙における我が權益を侵し、國内においては、インテリがコミンテルンの戰線に踊り、階級闘爭は益々增長しつゝあつたに拘らず、依然として政黨者流は政權爭奪と利權運動に狂奔しつゝあるばかりであつた。皇猷を扶翼し奉る重責に自覺する青年將校達は、相抱いて悲憤慷慨しつゝ

あつたのである。

かやうな空氣が軍部内に充滿してゐたにも拘らず、政黨政治家はロンドン軍縮條約に於て、オメ〳〵と屈辱的な條約を締結し、益々小日本への國力削減に終始した。それは英米あたりが、大戰後デモクラシーを宣傳し、武力に依らざるところの、所謂思想的、經濟的侵略主義の手を東洋に延べるに當つて、巧妙に日本の大陸進出を抑止する奸手段に乘ぜられたのであつた。一方伊太利に於ては、ムッソリーニが起つてデモクラシーに不信任案を叩きつけ、土耳古はケマル●パシヤが起つて自由主義羈絆から脱して國權を恢復し、獨逸のヒットラーは敗戰國民に活を入れ、デモクラシーから轉向せしめて躍進し、デモクラシーの本場たる歐洲の天地は、あげてユダヤ人の世界征服陰謀の魔手を斷ちきつて、新らしき文化國建設に努力しつゝある有樣を見るにつけても、借着のデモクラシズムを着て、此の世を我物顔に踊つてゐる自由主義的既成勢力に對して、皇國の將來を憂ふる純眞一徹の青年將校の憤激に拍車をかけるばかりであつた。

荒木將軍は夙に此の傾向を憂へてゐる一人であつた。彼が軍政擔當の局に當るや、軍部は爲政者に向つて、廣義國防の立前から、國政に對する種々なる要求を提議したのであつたが、政黨は「軍人は政治に干與すべからず」の條文を楯にとつて、理非なく峻拒一蹴し去つたのである。

そこに軍部が政黨を排斥した動機と理論とがあるのであつて、かくの如く、白人の優越觀を助長せしむる軍縮案に對して、宇垣軍政の如く、政黨人と腹を合はせるか、或は泣寢入りして、政治不干與の條文を白眼視し乍ら、歐米の職業軍人と同樣の態度を持してゐるとしたなら、或は政黨との摩擦も見られなかつたかも知れない。その代り、日本の大陸政策も畫餅に等しく、滿洲國の建設も、今日の北支工作もあつたものではなく、支那の排日侮日を馬耳東風と、大陸から退却して小日本におさまり、人口過剰の捌きに窮迫する一方であつたかも知れない。

軍部が敢然として蹶起し、內に政黨者流の退嬰消極政策を打破し、外に白人の對日包圍陣を粉碎し、大陸の玄關口を益々擴大し、一躍大日本の威力を伸張し、權益を確保したる今日の事實は、少くとも、軍部が政黨に支配され、デモクラシー政治に抑壓されてゐたのであつたら出來ない相談であつた。支那事變を轉機として、英米盲從時代は淸算されやうとしてゐる。この歷史的な事實を見るに至つたのは、軍部が皇軍たるの立場に返り、政黨あたりが之を動かす力が無くなつたからで、若し往年の如き政黨政治時代であつたなら、東洋民族は英國あたりに骨までシャブられてゐたかも知れない。之を以ても、國民は滿腔の誠意を捧げて軍部に感謝すべきであり、同時に、政黨も一大轉向すべきであらうと思はれる。

政黨者流は、政黨を排擊することは、直ちに憲法政治を破壞し、議會政治を否認して、ファッショ專制政治を行ふのと同義語の如く觀念し、國政刷新を叫ぶことは軍政府でも樹立するものゝ如く考へてゐるやうであるが、それは誤謬であり、事實を知らずに他を誣ゆるものゝやうである。

政黨を排斥することは、既成政黨を排斥するものであり、自由主義を清算して、國體を明徴にした皇國獨自の新文化建設を意慾するものであつて、政黨が、一君萬民主義の本質に自覺するならば、敢て國民大衆が軍部にのみ信頼せんとする思想に偏執せず、眞個の軍民一體の綜合力を發揮して對外的國力伸張に邁進し、政黨内閣であらうと何であらうと、誰か文句をいふ筈もないだらうと思はれる。

革新氣運を高めた林内閣

林内閣が第七十議會を最終日に解散したことに就いては既に述べた處であるが、かくして昭和十二年四月末日、櫻の花も散り褪せて、野には若草の燃ゆる頃、維新氣運、動く中に、第二十回の總選擧が執行された。

この總選擧には、中立候補者が增加したのは注目すべきではあつたにせよ、明治、大正昭和を通じて築き上げたる既成政黨の選擧地盤は、一度や二度の總選擧で、大勢を回轉せしむる變化のある筈はない。即ち既成政黨に依つて組織されたる萬般の制度下に於て行ふ選擧が、いかに肅正選擧であらうとも、それが既成政黨の數量を抹殺出來るものではない。いかに時代錯誤であらうとも、いかに理論が發展しやうとも、現在の組織の上に立つ限り、彼等に凱歌のあがることは明々白々の事實であり、永年に亘つて訓練した細胞組織は、一朝にして打破し得るものではない。

けれども、面白いことには、從來の總選擧であれば、その結果に於て勝利を得たる政黨が、祝盃をあげ乍ら内閣を組織し、政黨の首領は首相官邸から主義綱領を發表して、隊伍を整へて特別議會に臨むといふ風であつたが、もはやさうした風景は過去の追憶であつて、どの政黨が第一黨になつたにせよ、政黨内閣が出來ると考へるものは少くなり、この傾向は政黨自身も是認するやうになり、國民の大部分はスポーツでも見るやうな氣持ちで「清き一票」を行使してゐることである。

林内閣も與黨が少いからの理由で解散したのではなかつた。而して林大將は、新政黨の

樹立を希望したのであつたが、それは「希望」の程度であつて、自ら進んで組織する用意も無ければ、積極的に促進策を施す熱情もなかつた。

從つて、新黨樹立計畫も、再解散の意思をほのめかしたことも、政黨を反省せしめ、威壓を加へるゼスチュアに過ぎず、政友會の脱退組が足溜りに作つた昭和會あたりが中心になつて、頻りに新黨運動を策したが、實際的には容易なことではなく、且つその機運も熟してゐなかつた。

新黨運動は、兒玉遞相あたりが表面に動き、昭和會の老獪なる望月圭介あたりが音頭とつたのであつたが、政府としては、希望するといふ他力本願に依存し、世間の顏色を探つたやうであつたが、かやうな生やさしいことで新黨が組織されると見たのは、餘りに政界の實情に通達せぬことであつて、林大將もトコトンまで押す覺悟と用意に缺けてゐたやうであつた。

政黨も亦、政府の肚を讀んだので、切角足並みを揃へて總選擧に臨み、その結果は矢張り政民兩黨が絶對多數を占め、議會に於ける大勢には何の變化もなかつた。

そこで政民兩黨は提携して、林内閣打倒の運動を起し、世間に氣兼ねし乍らも、兩黨から多數の實行委員を擧げて小田原評定を重ねてゐた。

一方林内閣は、場合によつては再解散斷行も辭せずと、頻りに强氣を吐いてゐたが、總選擧の結果を見て、頗る苦しい立場に立つたことも事實で、特別議會の召集期日を引延ばし、其間に政黨の分解を策せんとしたが、既に政黨では倒閣運動に依つて黨員の結果を固めるといふ先手を打つて出たので、政府の策戰も思ふにまかせぬものがあつたやうであつた。

然れども、政府としては飽迄も强氣であり、林首相は總選擧後の五月三日「現下の情勢は容易ならざるものがある。之を克服する爲には、因循を排し、矯激を戒め、時勢に適合した革新を斷行する外ない。新に選出された議員は、私を滅し公に奉ずるの精神を以て、國體の本義に基き、肇國の理想を顯揚し、我國獨特の憲法政治の發達を圖り、正しき時局

認識の下に、大政翼賛の實を擧ぐべきである」旨を聲明し、國策を協議して特別議會に臨むことを宣言した。續いて六日、西下の途中にある伍堂商相は「不信任案が出ても政府は桂冠の必要はない。當然そんな場合に直面したら再解散あるのみで、此の態度に變りない」と語り、十六日兒玉遞相は政黨と決戰することを言明し、翌十七日召集の地方長官會議に於て、林首相は「政黨は日本本來の姿を忘れて歐洲流になつてゐる。世界に只一つしかない日本を、各國に共通する通論で當てはせめて行く事は間違つてゐる。日本の政黨は互に眞面目にいま少し政府も政黨も肝膽を披瀝してやるべきである。總選擧の結果政民兩黨が澤山出ても、大命を拜辭しやうとは當初から考へて居ない。こゝで私が直に拜辭しては何の爲に解散を奏請したか意味がなくなると思ふ」との意思表示をした。更に十九日首相は再び心境を吐露し「藩閥政府に反抗して起つた自由主義思想は、次第に成長して政黨政治に迄發展し、遂に種々の弊害を生じ、黨利黨略に流れ、政權爭奪のみを事とし、眞面目に國事を論議しやうといふ考へが全然みられなかつた。政黨の自肅自戒は、私の考へばかりでなく、既に輿論になつて居る。我國の憲法は人民から強要されて出來たものではない。議會における多數黨が、必ず政權を握ることは、外國流の考へ方で、我國にそのまゝ當てはまらぬ」ことを聲明した。

此間に政府は物價對策委員會、文敎審議會を組織したり、企劃廳を設置したり、或は地方長官會議、警察部長會議等を召集してゐるのだから、如何に政民兩黨が倒閣運動を起し、如何に新聞が自由主義的大提灯をつけたりしても、特別議會も開かずに政府が退却するとは思ひもよらぬことであつた。

けれども、政府は如何に政黨と正面切つて戰ふの決意ありとしても、實際政治の線に添ふ用意がなければどうにもなるものではない。たとひ特別議會に於て再解散したりとしても、どうせ現行選擧法の運用による總選擧の結果は、その歸趨が明らかであるとするならば、勞多くして功少い結果になるので、此の點に觸ずして、徒らに空威張りすることは、却つて時局を混亂に導くばかりであつた。

此の根本問題に遡り、或は自ら政黨組織に乘出す用意のない林首相に對しては、革新派としても不滿を藏したのであつた。

そこで林首相は、革新派の建川美次、小林省三郎兩中將に對して、ひそかに援助を求め、暗に兩將軍の入閣を慫慂したのであつたが、兩將軍共政府が案外に統制とれてゐないので、その入閣を拒絶したと傳へられたのであつた。尤も當時兩將軍の林首相訪問は、政府を激勵した旨新聞に報ぜられたのであつたが、事實は反對であつた樣であつた。

林大將としては、兩將軍を入閣せしめ、革新勢力を動員し、特別議會に選擧法の改正案を提出し、倒閣の氣勢をあげてゐる政、民、社大の既成政黨が反對するのを待つて、斷乎再解散し、直ちに右の改正選擧法案を勅令によつて公布、即時實施する意圖であつたと傳へられたが、一方に於ては、建川、小林兩將軍を入閣せしめるのは、革新派の急進分子を抑壓し、政黨と妥協して漸次革新政策を實施する肚であつたとの風評も取沙汰されてゐた。

果して眞疑の程は判りかねたが、兩將軍と會見後の林首相は、組閣後の初めて湘南の別莊に赴き、周圍を退けて沈思默考したことは事實であつた。歸京後平沼樞相を訪問し、直ちに官邸に歸つた首相は、臨時閣議を召集して、重臣方面に只ならぬ空氣が動いてゐる旨を打明け、早速總辭職を決行したのであつた。時に五月三十一日、去る二月二日成立以來、極めて短命にして林内閣は終り、近衞内閣となつて今日に至つたのであるが、齋藤、岡田兩内閣は飽迄も現狀維持に終始し、廣田内閣は庶政一新を聲明してゐ乍ら、之を實際化する段取りに至らず、林内閣は正面から自由主義勢力を驅逐しやうとする日本主義的色彩を濃厚にしたので、短命ではあつたが、昭和政界史上に特筆さるべき印象を殘した譯である。

併し乍ら、林首相の革新的意圖は多とするも、而してその思想的動向を示唆した事實は認められるのであるが、實際政治の局に立つ者は、政治界の實情に通達することが必要とされ、然し陋弊を改革するに當つては、非常の覺悟と勇氣がなければならず、此の點林首

相に缺くるところがあつたかの印象を一般に與へたのである。

七十三議會と政局の動向

以上の如く、犬養政黨內閣倒れて以來、近衞現內閣に至る間、政黨は久しきに亘る受難反省の時代であつた。

齋藤內閣は中間的な暫定內閣との見通しのもとに、おとなしくその傘下に雨宿りしたのであつたが、その後政權は再び政黨の前を素通りすると知るや、先づ政友會が既成勢力の聯合群から脫走して抗爭し、二・二六事件起るや、再び仲間喧嘩をやめ、廣田內閣に協力して閧として聲なかつた政民兩黨も、それは思想的に一致したのではなく、餘儀なく協力した關係上、忽ち議會中に軍部と衝突してしまつたのである。而して廣田內閣倒れて宇垣大將に大命が降下するや、彼等は心ひそかに萬歲を叫び、兜町あたりも相呼應して祝賀景氣を立てたのであつたが、意外にも宇垣內閣流產に失し、時代の流れは益々政黨人の意慾

する處と反對のコースに流れてゆく事實を知つたので、林內閣時代に至つて政民兩黨聯携の氣運は漸く進展するに至つたのであつた。

而して近衞內閣成るや、近衞公は各方面の對立や摩擦を防がんとして、林大將とは逆に政黨とも協力の手を延べたので、政黨も一名宛の閣僚を、然も個人の資格で入閣する交涉に應じ、林內閣當時の政黨否認に對する倒閣運動の旗を引込ますに忙しい有樣だつたのである。

近衞內閣の政策や近衞公の人柄や抱負等に就いては今更こゝに說く必要はなく、近衞公は時代の人氣を一身に蒐め、乃父霞山公讓りの大陸政策に經綸を行はんとしてゐた折も折柄組閣後間もなく支那事變が勃發したのである。

此處に於てか、我國體の精華を發揚し、國民は期せずして擧國總動員となつたのであるが、此の支那事變こそ、世界に一新紀元を劃する歷史的な事實であつて、事變を轉機として國民の愛國思想は益々高調され、國內に於ける蝸牛角上の對立鬪爭を放棄し、未曾有の

難局を突破する文字通りの擧國一致の體勢を整へたのである。

而して、支那軍閥が排日、侮日、抗日に傾向したのは、その背後に自由主義、民主主義共産主義の思想的勢力の對日總動員の結果であつて、萬邦無比なる國體を維持する日本の秩序を破壞し、東洋の廣大なる領土から、資源を獨占せんとする魔物の正體あるに感づいた日本は、從來の如き英米盲從の外交、英米思想そのまゝの制度の矛盾を痛感するに至り、益々以てデモクラシーに對する不信任の氣運が濃化された譯である。

そればかりではない。今度の戰爭は、日本の領土的野心に出發した侵略主義戰爭ではない。善良なる支那民衆は、阿片に醉ふて徒らに仙境の夢をむさぼつてゐる間に、血を吸はれ、肉を嘗められてヘト〳〵になつてゐる。生きんがために、よろめき乍らものた打ち廻つてゐる彼等の暗夜の世界に、皇道日本の溫い熱と、明るい光りとを與へてやる正義の戰爭である。從つて、それは我國と歷史的に、地域的に、文化的に、經濟的に、あらゆることに於て切つても切れぬ間柄にある善良なる隣人、支那四億の民衆を相手とする戰爭ではない。そして、此のやうな正義の立場に立つて、東亞の民族を指導し、日本の主張を貫徹させんがためには、並ならぬ努力と、永い時間とを要し、堅忍不拔の思想を以て貫かねばならないのである。そこに日本國民の持久戰覺悟が要求されるのである。實に東亞の將來は容易でないものがあるのだが、然し、それは八紘一宇の大精神に自覺せる日本民族の爲さねばならぬ聖業であり、東亞維新の大使命を遂行するわれわれの名譽ある聖業なのである。

從つて、われわれは徒らに排他的な思想を持つてはならぬこと勿論だが、東亞の利益を搾取し、東洋の平和を攪亂するもの〻宣傳に迷はされることなく、飽迄も東洋永遠の平和を確立する使命に向つて邁進しなければならないであらう。

此處に於て、我國は共產主義は言ふまでもなく、民主主義、自由主義等の歐米流の政治思想は許さなくなり、現實的な大陸政策にしても、永遠不變の國策を以て臨まなければならぬことになつたので、從來の如く、黨利黨略に依つて動く自由主義政黨が、互に政權爭

奪をするなどといふ事態は斷じて許されなくなつたのである。

例へば、滿洲事變後ユダヤ財閥を中心とする英國が、ハモンドやカーク●バトリツタやリースロスやハス博士（何れも英國ユダヤ人）等を支那に派遣して、鐵道視察、產業調査幣制改革を行つたが、曾て我が寺內內閣時代行はんとしたる對支政策は、山西軍の二千萬圓借款問題を始め、當時既に支那の幣制改革に及ばんとしたもので、現在の英國のそれよりも、寧ろ進步したやり方であつた。然るに寺內內閣の後を承けた原內閣では、前內閣の政策と反對の行動をとつたので、切角の對支政策も有耶無耶に終つたのである。當時わが出先官憲からは、頻りに之が實施方を要求して來たのだが、自由主義財政家の權威と謳はれ、英米あたりに人氣を博した高橋是清藏相は、山西軍の借款が未だ殘つてゐたにも拘らず、斷乎として之を放棄したのである。

其後に於ても、田中大將の政友會內閣時代には、支那に屢々出兵して、實力を背景とする强硬政策を斷行せんとしたに拘らず、民政黨が政權を獲得すれば、有名な幣原外交となつて、全く相反する軟弱外交振りを發揮したのであつた。

かゝる變轉極りなき對支政策では、朝の約束は夕に反古となるといふ風で、支那側にとつて見れば、日支提携といつた處で、どこと提携してよいやら判らないことになり、支那側の日本に對する不信用は、我が國策遂行の上に重大なる影響を及ぼしてゐるのである。

この樣な過去の經驗を、之を今後に處する教訓とするならば、東亞の盟主として、戰後の政治、經濟、思想、產業等の新文化建設を指導する日本が、從來の如き政治機構であつてはならぬといふ結論に到達する。

之は單なる理論ではなく、實際問題として、事變を契機とする我國の政界が、この結論に向つて動きつゝある樣であるが、近衞內閣の補强工作、一國一黨論の擡頭、既成政黨內に胎動する合同の氣運等は、即ち此間の消息を傳へるものであつて、此の第七十三議會を轉機として、政局は新たなる方向に步みを進めるものと思はれる。

頭山翁等政黨合同に乘出す

近衛內閣は事變勃發後、內閣參議制を設け、各方面の人材を網羅し、林內閣時代に出來た企畫廳を擴大して企畫院となし、時艱克服に處する用意を整へてゐるが、一方內閣の人事に於ても、安井文相辭任の後に木戸幸一侯を入れ、馬場內相辭任の後に末次信正大將を入れたのは、此の內閣を强化するに相當の効果をおさめてゐる。

殊に末次大將の如きは、軍政系の人ではなく、軍令部や艦隊に在つて、非常時日本の海軍を指揮した海軍强硬派の大立物であつた。大將が現役を退いて參議に就任したことでも、世人をアッと言はせた程だつたが、更に全く畑違ひの內務大臣となつたことは、客觀情勢がさうさせたとは言ひ乍ら、之を迎えた近衛首相、入閣した末次大將の覺悟の程も推察するに難くなく、今後の政局の動向を暗示する有力なる資料たるを疑はないのである。

末次大將は內相に就任當時「日本も一國一黨とならぬものか」と語つたが、十二月十六日、國民長老たる頭山滿、一條實孝公、山本英輔海軍大將は、突如三氏の連名を以て、强大なる單一政黨の樹立を要望する檄文を飛ばしたが、「全國民に告ぐ」と題する飛檄は各方面に大きな衝動を與へたことは事實で、既成政黨方面の合同運動にも拍車を加へたやうであつた。而して右の聲明書なるものは全國に三十萬枚發送されたと言はれるが、その全文は左の如くである。

「全國民に告ぐ」

（一）萬世一系の天皇儼然として國家組織の中心を爲し給ひ、億兆心を一にして天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、君民一體、忠孝一致、此れ我が國體の本義なり。汎く國家生命力を結合し、之を精神的不動の中心に綜統して、大和の美を成すは、皇國經綸の大鐵則なり。

歷史を顧るに、國體本性の最高に發現せる時、我が民族生命は自ら高上充實し、國威燦然として輝き、國勢駸乎として進む。大化の改新然り、明治の維新然り。然る

に其の體制亂るゝや、每に國家生命力の萎靡沈滯を免れず。蘇我物部の抗爭、足利末期の紛亂等の如き、其の間、外に皇威の伸びたるを見ず、內に交運の興りたるを聞かず。今日吾人の認めて以て、國是の指針となすべきものは、此の歷史理法即ち是なり。

近代我が國家の憂患は、悍然として、肇國の大道を邁進するの大生命力を缺くにあり。誰か國家の現狀を指して、皇國眞姿の顯現なりと謂ふものあらんや。今や世界は、秩序壞亂、禍機蠢動、正に歷史的轉換の潮頭に立てり。此の秋に當り、內、國力を結合して一體となし。外、世界未曾有の變局に處して克く時艱を濟ひ、以て天地不易の大道を顯示するは、我が民族天與の使命なり。

(二) 憲法政治を以て、政黨對立の政治と解するが如きは、西洋思想の餘毒に外ならず。況んや非常情勢の愈々激化せんとする此の國難期に於てをや。抑々我が皇國に、政治的結合即ち政黨の存在する理議は、擧國協力の下に、天業恢弘の國是遂行を協賛せんが爲にして、報國の大道を行ふ所以なり。彼の權利と利益との具たる西洋流の政黨とは、全然其の本質を異にす。故に西洋の政黨は、國民各層分立するに反し、皇國の政黨は、全國民の一致せる精神に即して一體となる。

此の理議を徹底せしむるの要は、今日の時局に於て、殊に痛切を極む。蓋し國民的一大結合は、經濟、思想、文化等の一切を通じて、之を成就するを要すと雖も、現今の非常情勢に在りては、先づ我が國獨特の政治的結合を遂げ、內外國運發展の樞軸たらしめざるべからず。空前の國難に際し、尙ほ大局に着眼せずして、口舌の爭を反覆しつゝあるが如きは、實に政治的基本力の未だ存せざるに由る。

(三) 惟ふに國民忠勇の丹心、出でゝ戰線に立つ者は、奮戰敢死して敵を討滅すべく、留りて業務に就く者は、一國一家の成員となりて、國務の根柢に參加すべきなり。正に是れ道義立國の皇謨にして、日本國民政治奉公の本分なるべし。

現存一切の諸政黨は、宜しく速かに此の理法に鑑みて覺醒する所あり、彼此相對の

境地を超越し、渾然一丸となつて、強力政黨の新組織を遂げ、全國民意の歸結を明徵ならしむべし。苟も之を怠らば、現存諸政黨は歴史的鐵則の下に粉碎せらるゝの日、必ずや遠きにあらざるべし。

我が肇國精神の政治理念に基き、非常時局に則する政治情勢の展開速かならんことを、要望して已む能はず、敢て連名以て之を全國民に告ぐ。

公爵一條實孝、　頭山　滿翁、　海軍大將山本英輔

支那事變以來、之に對應する戰時體制の整備は全國民の要望して已まざる處であるが、政黨は對立分散を續けて強力なる單一政治勢力の結成を示さず、近衞內閣も何かにつけて革新を躊躇するかの感を與へてゐるので、かやうな情勢では、戰後に於ける經營に當つても萬全を期し難かるべきを憂慮し、且つ政黨方面にも合同運動の氣運があり乍ら、未だ積極化されてゐない事情に鑑み、右の三長老が產婆役を買つて出たものゝ如くである。

政黨は何處へ行く

近衞內閣結成以來、如何に政黨人と雖も、軍政黨內閣の夢を追ふ者はなくなつた樣だつた。而して、政黨は對立抗爭すべきではないといふ考へ方は相當に內面化したのであるが、之を實際の形の上に表明するといふことは仲々容易な問題ではないやうである。

形の上に表すといふことは、先づ政黨の大同團結といふことが手近き處に待つてゐるのであるが、フランス革命の基礎をなした自由民權思想から生れ、英國の議會中心主義、米國の民主主義等の影響を受けて發達したデモクラチックの既成政黨は、そのイデオロギーを淸算し、日本獨自の政治形態に改革するには、一たんその結社を解き、御破算にして出直さなければならないが、それ程までの勇氣の犧牲心が彼等にあるや否やは疑問である。

そこで現狀の儘で何とかならぬものかと思案に耽り、徒らに形勢觀望主義をとつてゐるのだが、風の吹き至るを待たんとする風車、それは果たして何時の日か、風の吹き來る頃

は、風車は破れ崩れて、廻るに由ないことになるかも知れない。

この形勢に鑑みて、政友會の山本悌二郎、川村竹治、民政黨の富田幸治郎、賴母木桂吉氏等は、常盤會を結んで、十二月來頻りに合同運動を策してゐるのだが、政友會の山本悌二郎氏に、國體明徴問題、對支問題、對英問題等に活潑なる活動を見せ、非常時局の政黨更生運動にも熱情を傾けてゐたが、惜しいことに突如腦溢血で不歸の客となつた。

山本は政友會に於ては、川村や小久保喜七、小川平吉、猪野毛利榮氏等と共に國粹主義を以て任ずる國士肌の男で、同黨に於ける鳩山一郎や島田俊雄一派の自由主義者と相對し、時局柄その活動を期待する向が少くなかつた。

彼が倒れる前夜、赤坂に於て政黨合同を中心に國事を語り明かした川村あたりが、何れ今後の常盤會に於ける中心人物となつて活躍するであらうが、民政黨にも政友會にも、之を一つの陰謀呼ばはりをしてゐる者があり、中島鐵相は「政民兩黨が主體となるのでは意味をなさない」旨を述べ、暗に常盤會に對する行動を牽制しつゝあるのは注目すべきであ

り、誰を中心とすべきか、如何なる具體的內容を持たして進むべきかは未だ實際化されて居らず、之等は技術上に苦心されてゐるやうであるが、偶々頭山、一條、山本三氏の擧國一致即時結成を要望する聲明、末次大將が內相に就任し、直ちに人民戰線に一大痛棒を與へたこと、及び民主主義、自由主義は動もすれば共產主義の溫床となり易く、コミンテルンの巧妙なる戰術は、漸次合法的な方面に魔手をのべてゐる事實を指摘された思想的影響等は政黨の合同運動に有利な條件となり、七十三議會開期中には、相當具體化されて行くものと信ぜられてゐる。

若しも政黨が、時局を認識せず、飽迄も國民的輿望に應ふることなく、從來の如きイデオロギーを淸算することなくんば、それは躍進日本の、自由主義を放棄して、儼然たる日本本然の姿に還元し、世界維新の大使命を遂行する皇國の大政翼贊の責を回避するものとして、最後の裁きを待たねばならぬのであるから、自ら墓穴を掘ることなく、時代は旣成政黨の一大轉換を要求し、以て擧國一致の實力を養つて內外に亘る一大刷新の實を擧げら

れんことを要望してゐるのである。

時局の及ぼす政界への影響

支那事變は日本國民の對世界觀に大きな變化を與へた。と同時に、東洋文化の再檢討といふ機會を與へ、日本精神に體達する絶好の機會を與へたのである。久しく歐米デモクラシー文化に依つて躾けられてゐた日本國民も、この事變を轉機として、漸く國體觀念に自覺し、皇國本來の大使命に自覺するやうになり、民族的自主觀念を昂揚するに至つた。

而して、此の時代思潮を、政治の上に、經濟機構の上に、社會制度の上に制度化し、組織化するのが今後に殘された問題で、時局は事變終了後に一層深刻化し、特に內政問題としては、今回の出征兵士が榮冠を負ふて凱旋するまでには、少くとも戰後經營の國策大本を確立することが緊急問題とされてゐるのである。それがためには、强力單一政黨を結成し、革新的國策の遂行を遺憾なからしめなければならぬ實情にある。

更に對外問題を考へても、從來の如く、政變毎に、猫の目玉のやうに外交方針が變ずるやうでは、今次の事變を通じて一大犧牲を拂つたにも拘らず、何等の効果をも收め得ない結果になるのであるから、東亞を指導し、世界に皇道文化を宣布する立場に立つた日本としては、國內に於ける相剋を繁からしむるが如きことがあつてはならぬであらう。

從つて、內政上から言つても對外政治上から言つても、國體を明徵ならしめ、皇國本來の理義に基く新たなる制度を要求されてゐるのであつて、この國家的要求に對處するためにも、七十三議會に於ける政黨の動きは、絶大なる注目が拂はれてゐるのである。

一方政府に於ては、末次大將が內相として加つたことは、近衞內閣の革新勢力を强化したことになり、更に保健社會省の開設と共に、傳へらるゝ如く荒木大將の入閣が實現するとせば、現內閣の補强工作が一段と生彩を加へるものとされ、末次、荒木のバッテリーに依つて、庶政一新の實踐力が重加されてゆくものと期待されてゐる。

最近社會大衆黨は、從來の看板を塗替えて、頻りに軍部に協力し、階級鬪爭の運動を放

棄し、協同社會主義を唱ふるやうになつたことは注目すべきで、之に反して政民兩黨は、政府鞭撻の聲明書を發したり、皇軍慰問使を派遣したりはしてゐるが、明らかなる指導精神を示さず、何等主張する處なく、形勢觀望に日を送つてゐるやうであるが、かくの如き消極保守的な態度を持續するのは如何なる理由であるやは知る由もないが、國民の愛國思想が高まれば高まるに從つて、自由主義思想の清算を要求されるといふ時局の動向に對する認識の不足も、たしかに彼等をして因循姑息ならしめてゐる所以であらうと思はれる。

曾て日獨防共協定を締結した時、コミンテルンの策動を防止することに異議はないが、獨逸と手を組むといふことは、英國の御機嫌を害ねるといふので、政界の上層方面や財界方面では極力之に反對したとの由、當時の外務政務次官たりし猪野毛利榮代議士が述懷してゐたが、如何に詳細に亘つて說明しても、容易に理解されなかつたとのことである。

又伊太利がエチオピアと戰つた時、國際聯盟は經濟封鎖を斷行し、英國の艦隊が地中海に出動した。そこで伊太利では、國際聯盟を脫退した日本に石油を求めたのであつたが、當時の日本の實業界では、英國の御機嫌を害ねまいとする爲政者の顏色を讀んで、伊太利の要求に應ぜず、石油を賣らなかつたのである。

併し乍ら、かやうに義理立てしてゐた英國が、果たして日本の友邦であるや否や、それは今度の支那事變に於て、彼等自ら解答を與へたのであるが、今や日本は自由主義的デモクラシーに不信任案を叩きつけた獨逸、伊太利と固くスクラム組んで、世界の新らしき秩序を建設するに寄與する立場に立つたのであるから、思へば僅かの年月の間に隔世の觀があり、このやうに自覺せる國民の頭上に、自由主義的な旣成政黨の照らす提灯では、もはや日本國民は歩めないのも無理からぬことであらう。

皇道日本、ナチス獨逸、ファッショ伊太利を樞軸とする反ユダヤの勢力が、ユダヤ人に征服された英、米、佛、露のデモクラシー國家と角逐する宿命的な時代に至つて、日本の政黨が、飽迄も民主主義や自由主義に立籠つてゐるといふ事實は、哀しむべきことである

と同時に、國權伸張の聖業に對する邪魔物でさへある。自由主義、民主主義、社會主義は共產主義陰謀の溫床となり易い。自由と我儘と放縱とは何を以て區別すべきか。

兎に角、支那事變が一新紀元を劃する日本の轉換期でありとすれば、第七十三議會も亦歷史的な議會であり、政局は事變の要求に應じて刻々に動いてゆき、政黨は一大回轉の秋に直面したのである。昭和維新は之からであり、時代は大きく弧を描いて回轉するであらう。

社告

蘆溝橋事件に端を發した日支間の紛爭は勿ち北支の空を覆ひ、其波及する所南支に及び、其の間にありて、皇軍の惡戰苦鬪と銃後の國民一致協力とは遂に實を結び、さしも頑張に抵抗を續けた上海は落ち南京も吾が手中に歸し、蔣政權も一敗地にまみれて暗雲低迷せる北支、上海、江南の空にも和平の曙光が輝き初めました。

この非常時に當り、吾が亞細亞出版社は文化の先驅として、亞細亞大陸に雄飛すべく着々と其の計畫に向つて邁進せんとして居ります。

幸ひ諸賢の御鞭韃と御指導を得れば金城鐵壁、何卒御愛顧の程を希望して止まない次第であります。

▼パンフレット出版　▼月刊漫畫情報

▼各種圖書出版並取次

東京市下谷區車坂町八九

亞細亞出版社

電話下谷(83)四七六七番

振替東京七一五二七番

戰時議會と政局の新動向

定價二十錢

昭和十二年十二月三十日印刷

昭和十三年一月二日發行

著述者　大野愼

（不許複製轉載）

編纂兼發行者　坂梨正明

東京市下谷區南稻荷町五二

印刷所　三優堂印刷所

印刷人　高野彥三郎

東京市下谷區車坂町八九

發行所　亞細亞出版社

電話下谷(83)四七六七

振替東京七一五二七番

新聞界の最高權威!!

讀賣新聞

月刊　毎月一回一日發行

漫畫情報

定價二十錢

◎時局が一眼で判る！
◎數十册の高級雜誌讀む必要なし！

東京市下谷區
車坂町八九
亞細亞出版社發行
電話下谷四七六七番
振替七一五二七番

亞細亞出版社